
純恋淡雪

池鷹緒梨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純恋淡雪

【Nコード】

N5984A

【作者名】

池鷹緒梨

【あらすじ】

春の雪は大きな牡丹雪のように降ってはすぐに消えてしまう
1人の少女とその周りの人物達が織り成す、淡雪のような純恋ストーリー。

第一話

私、桐生鈴子きりゆう すずこは高校2年生になんとか上がることができて、新しいクラスには去年に引き続き仲良しの市川あゆみがいる。

始業式から数週間経った頃には浮き足立ったクラスの雰囲気も段々落ち着いてきていて、あゆみの予想だと今日のHRで席替えが行われるんじゃないかって。

席替えかあ…できれば窓側がいいな。

この時期は丁度良い具合に陽が射して、景色もいいからきつと気持ち良いはず。

そんなことを考えながら朝7時という相当早い時間に1人で学校に向かって歩く。

昨日の夜、ふと今描いている油絵のインスピレーションが沸いたから。

こんな時はすぐにでもそれを形にしたい。割とゆつくりとしたペースが特徴のうちの学校の美術部に入ってはいるものの、色を重ねたくなってしまったら早起きだって苦にはならないんだ。

ガチャ、ガラッ…

顧問の先生には内緒で作った美術室の合い鍵を使ってドアを開く。まず第一にカーテンを勢いよく開けて窓も開放すると朝の匂いが絵の具の匂いに混じり、柔らかな風が吹いて陽の光によって茶色く透けたセミロングの髪を揺らす。お気に入りのそんな瞬間を楽しみながら深呼吸をすると暖かい日差しをいっぱい浴びた。

HRが始まる1分前に教室に着いた。

2年2組。クラスメートの顔と名前はまだ完全には一致してないんだよね…。

「あつ、鈴子。今日遅かったね。おはよ！」

席に鞆を置くと、あゆみが駆け寄ってきた。

そう言えばいつもは私のが先に教室着いてたっけ。

「おはよ」。絵描いてきたの。慌てて片付けてきたトコ」

「朝から？好きだねえ」

クスクス笑うあゆみは可愛い。綺麗に栗色に色が抜かれたロングヘアにはすごく憧れる。これで彼氏がいらないなんて世の中間違ってると思う。

前にどうして彼氏作らないのか聞いたことがあった。あゆみはそれなりに告白とかされてるのに、OKしたって話をまったく聞かないから不思議に思ったんだ。

「私ね、兄貴がいるんだあ。2コ上なの。ム力つくけど、私と比べたらすごい頭良いし運動神経もそれなりなワケ」

そんな風に語り始めるあゆみに、私は意図を理解しきれなかった。で、思わず出た言葉…

「え？あゆみってブラコン！？」

「違うから」

即答で否定されたけどね。

話を最後まで聞けって怒られた。

「んで、私って負けず嫌いでしょ？」

私は余計な口を挟まないように頷いただけ。

「だからさ、なんかやなんだよね。兄貴以下の男と付き合ってるのが」

兄弟がいない私にとってはさっぱり分からない話だった。

結局曖昧に相槌を打ってあゆみに不満げな顔をされたのを覚えてる。ちなみに未だにその“兄貴以上”な人は見つかっていないらしい。

「…こ？鈴子！」

「え！？あ、ごめん。何？」

「もう。だからね、私のカンが当たったの」

「カン？」

話を聞き流して回想に耽っていたせいでさっぱり分からない。

あゆみは私の額に軽くデコピンをする。

「ほら、席替えの話」

「ああ！本当にやるんだ？」

「さっきユリリンに聞いたからまちがいない」

ユリリンっていうのはこのクラスの担任の先生、本名は百合千晶。ゆり ちあき

20代後半でそろそろ彼氏との結婚も陰ながら噂されている美人化学教師だ。

そう言えばさっきチャイムが鳴ったはずなのにユリリンはまだ来ない。

「そっか。やっぱりクジだね？緊張するなあ」

「席替えくらいで何言ってたか。とにかく1番前の列だけは回避しなきゃ！」

そうやってあゆみが意気込んだところで数分遅れてユリリンが教室に入ってきた。

私達は目配せをして、お互いの健闘を祈ってから席に着いた。

私が引いた紙切れに書いてあったのは“12”という数字。

黒板に書き出された席の番号を確認する。

…まずは1列目。

「よかったあ。1番前じゃないみたい」

それから端から順に確認していく。

驚いたことに、私の新しい席は希望通りの窓側。しかも、1番後ろの席。

「鈴子どこだった？」

「ん？あの席！」

みんなが新しい席にあーだこーだと思い思いに騒いでいる時にあゆみが引いたクジを握りながら話しかけてきた。

私は自慢げに決まった席を指差す。

案の定あゆみは物凄く羨ましがり方。あゆみはと言うとちょうど私と対角線上にある前から3列目の席だった。

うーん、ちよつと離れちゃったな。

やがてガヤガヤとみんなの席移動が始まる。私もなんとか席を移動し終えてふと前の席に目を遣った。

さらさらの黒髪に色白、スラリとした体格の男の子。彼はさつさと席に座って頬杖について外を眺めている。

確か、カツコイイって評判の人だった気がする。

曖昧な記憶を辿りながら私は左側にある窓に手をかけて、他の人の迷惑にならない程度にそれを開けた。春特有の気持ちいい風が流れてくる。

こんな特等席、ずっと席替えが無くてもいいかも。

「…なあ」

「えっ？」

いきなり声をかけられて素っ頓狂な声をあげてしまった。

前の席の彼がいつの間にもやら窓に背を預けて横向の格好で座っていて、私を見る。そしておもむろに口を開いた。

「桐生さんて絵描く人？」

「え？あ、うん…美術部に入ってる」

「ふうん」

「…あの…？」

いきなり何を言い出してんだろ。

私の頭上には疑問符がしこたま浮かんでいる。

前の席の人は教室の様子に目を遣って、その少しの沈黙にどうすることも出来ないで内心困っているといきなり視線が重なった。

「まあ、しばらくよろしくね」

「はあ…」

彼は私の曖昧な返答に気を悪くする素振りもなく、また椅子に真っ直ぐ座り直してさっきと同じように頬杖をつく。

変わった人…なのかなあ？

そんな感想を抱く。

私は一度外に視線を向けるも、またすぐに前の人の背中に視線を戻した。

少し躊躇ったけど、軽く肩を叩く。

「ねえ、どうして私が絵を描くってわかったの？」

少しだけ顔をこっちに向けてから彼はさっき私が開けた窓を軽く指差す。

「風」

「風？」

「油絵の具の匂いがしたから」

「ああ…さっき美術室で少し描いてきたからかな」

「熱心だな」

クスリと笑って、また前を向いてしまった。

前言撤回。変っていうか不思議な人だ。

それからユリリンがみんなを落ち着かせてHRが始まった。私の目には、さっきの彼の笑顔がなぜか焼き付いていた。

第二話

もしも…

王子様が茨の城の中で迷ったとしたら。

白雪姫が眠る棺が、馬に乗った王子様の視界に入らなかったとしたら。

シンデレラが落としたガラスの靴を、王子様が気付かずに蹴っ飛ばしてしまったとしたら。

そんな風に考えてしまう私は、卑屈すぎるのかな…？

あゆみはモテはするけど基本的に男に興味がない。だからクラスメイトですら、その名前をきくと私と同じように覚えてなんかないと思う。

「ねえ、あゆみ。あの人の名前なんて…分かんないよね？」

それでも休み時間に入って早速尋ねてみたのは、単に他に聞ける人がいなかったから。相手は私の名前を知っていたのに今更本人に名前の確認なんかできなかったんだ。

でも私が指差した先の人物…つまり、私の前の席の人を見たあゆみは一瞬の間の後

「ああ」

と言ったから驚いた。

たかさか なつ

「高坂夏だよ」

「高坂くん、かあ。てかあゆみ、なんで知ってんの？」

「鈴子が聞いてきたんじゃない…」

私の疑問に呆れたようにため息をつくあゆみ。

いや、それはそうなんだけど。

なんだか釈然としない気持ちでいると、突然教室のドアが開いてギヤルっぽい派手な女の子が入ってきた。その子はまっすぐ高坂くんの席へ向かう。

「夏！」

外を見ていた高坂くんは彼女に声をかけられて初めて気づいたようだった。

「ね、今日アイス食べに行こうと思って」

「そうか」

「も〜。夏も一緒だよ？」

「なんで」

「夏と一緒に食べたいからあ」

「行かね」

「いやいやいやっ…さっきから3文字しか返答してませんけど！」

それでもあの子はめげずに高坂くんに話しかける。それどころか、寧ろ嬉しそうと言った方が適切だった。

私が面食らってその様子を見ているとあゆみがボソツと呟く。

「…うるさい」

「あの子すごいねえ。付き合ってるってワケじゃ…」

「そんなことあるわけないでしょ。確か…佐原美月さばら みつきとか言ったかな。高坂の追っかけだよ」

「へ？あ、そうなんだ…」

あゆみのあまりに早い返事に少し面食らってしまった。それにしても、追っかけて。

モテるんだなあ…なんて感心してしまう。

「そんなことより鈴子。今日うちにご飯食べにおいでよ？父親も兄貴もいないからさ」

唐突なあゆみのお誘い。思い出したかのように言っと、満面の笑みで少し首を傾げて覗き込む。こんなあゆみの仕草が出た時には既に拒否権なんてものは存在しない。

私は今までの経験上、すんなりとそれに頷いた。

あゆみの家は駅から少し離れた住宅街に位置する一軒家。

マンションで家族3人暮らしの私にとっては憧れだったが、あゆみに言わせれば『駅から遠いのはとんでもなく不便だし、マンションのが高くてカツコイじゃん！』って。

「鈴子ちゃんか。よろしくな！」

「ていうか何でいるワケ！？」

今日の前で繰り広げられようとしている兄妹喧嘩。

あゆみのお兄ちゃん、孝介こうすけさんの挨拶に頷こうとしたらあゆみの声に遮られてしまった。

「なんでって…お前それが兄に対する態度かよ」

「鈴子に手出したら東京湾に沈めるから」

あゆみの絶対零度の声色に、私の肩へ伸びかけていた孝介さんの手が止まる。

「…よし、飯食うか！」

突然そう言って話をそらすと孝介さんはさっさとダイニングに行ってしまった。

私は笑いを堪えることができない。

「…何笑ってんの？」

「別に」。仲良いんだね、お兄ちゃんと」

「だからブラコンみたいに言うのよしてよね…」

あゆみは眉間に皺を寄せてそう言うキッチンから、おばさんが夕食の準備が出来たことを知らせる声がした。

私は住宅街独特の駅までの暗い道を歩いていた。

あゆみの家からの帰り道。

隣には、孝介さんが並んでいる。

「あの、ホントに駅まで大丈夫ですよ？」

「いーからいーから。ちゃんと家まで送らないと俺があゆみに怒られる」

数十分前に突然あゆみがにこやかに口にしたのは『んじゃ兄貴、鈴子のことよろしくね』なんて言葉。

なんて言うか…今日の数時間でこの兄妹の力関係がだいぶ見えてきた気がする。

「…なあ、鈴ちゃん」

ふと孝介さんが口を開く。

私はいつの間にか孝介さんに“鈴ちゃん”と呼ばれるようになっていた。

「あゆみってさあ、男とかいないの？」

「え？」

孝介さんの言葉に思わず吹き出してしまった。そしてからかうように言ってみる。

「あゆみがブラコンなのかと思ったら、孝介さんはシスコンですか」

？」

「いやあ、俺はあゆみが大事だけどね」

驚いたことに、サラリと孝介さんは言う。

「それにしてもあゆみがブラコンってことはないでしょ。いや、実際そうだったら俺にとっては嬉しい限りだけど。…あの扱いじゃあねえ」

大げさにため息をついてみせる孝介さん。

「でもあゆみ、言っていましたよ。孝介さん以下の男と付き合うなんて有り得ないって」

「…あゆみが？」

孝介さんは立ち止まって驚いたように私を見つめる。

もちろん私は軽い気持ちでその話をしただけ。

だから孝介さんが見せた反応は意外だった。

「あの…？」

「あー…いや、鈴ちゃんがあゆみと知り合ったのって高校でだった？」

「はい。入学式で」

「そつかあ。うん、また遊びにおいで」

「え？あ、はい…？」

よく分からない会話になってきた。

不自然に頷く孝介さん。この違和感の理由を問い詰めても、きっとこの雰囲気じゃ無駄だろうなって感じさせる妙な空気。

疑問に思いながらも駅に近づいて、そして改札へ向かう。

「孝介先輩？」

…びつくりした。私たちが向かっていた改札から出てきたのは見知った人。

孝介さんに声をかけたその人は…

「お？夏じゃん！久々だなあ！」

高坂くん。

え？この二人…知り合いなの？

私が混乱して突っ立ったままいると、初めて高坂くんと目があつた。
「…先輩…妹の友達にまで手出してんですか」

「アホか。送るんだよ。うちに飯食いに来たの！…って、お前ら知り合い？」

朝と同じように、ふうん、と相槌を打つ高坂くん。

「同じクラスで席も前後。ちなみに自慢の妹サンと同じクラスですよ。まあ…市川は一言もそんなこと言わないだろうけど」

「え、そうだったのか？」

…何だろう、コレ。

高坂くんの口振りだと、あゆみと高坂くんは知り合いだったの？でも話してるところなんて見たことないし、目だって合わせてなかったはずなのに。

高坂くんはふと思い出したように孝介さんに視線を戻した。

「先輩、今度暇な時言つてくださいよ。知ってました？時季ときが帰ってきてるの。先輩にも会いたがつてるんですよ」

その言葉に、孝介さんは絶対に驚いたんだと思う。

高坂くんの言葉自体にも…って言うのかな。その表情にも、何か含みを感じた。

トキっていったい…？

私の視線に気づいて、孝介さんは出かかった言葉を飲み込んだみたい。

高坂くんの肩に片手を置いた。

「ま、その話はまたゆっくり聞かせろよ。今はうちの女王様の命令でこちらのお姫様を城にお届けしなきゃなんないからさ」

「…先輩それ寒い」

「うるせー」

二人は軽く手を振り合う。

「じゃあね、桐生さん」

「うん…バイバイ」

…私は気づいてしまった。

高坂くんが何気なく、私にも振ってくれた左手。

その薬指に輝いていたのはシンプルな銀。

今朝の彼の笑顔を思い出す。

それと同時に、私の目に焼き付いて離れてくれない、ちかちかとその存在を示す指輪。

ああ、そっか。

どうも私は、童話の中のお姫様にはなれないらしい。

私のこの履き慣れた黒いローファーは、蹴っ飛ばされる運命にあるみたいだ。

第三話

昨日は家に帰ってから何してたっけ？

考えてもまったく思い出せないや。

「はあ……」

1つため息をついてから教室のドアを開ける。

初めに目に入ってきたのは高坂くんだった。

…どうしよう。

挨拶する？…って言うか、別に気まづくなる必要無いよね。

私と高坂くんの間にかあつたってわけじゃないんだし…

「おはよ。どしたの？」

悶々と頭の中で考えを巡らせてゆっくり席に近づいていた私。

高坂くんいきなり挨拶されて驚いて固まってしまった。

「桐生さん？」

「え、あつ、うん。おはよ！」

慌ててそう言つて席に座る。

やっぱり視線が行つてしまったのは彼の左手。

昨日のコトが現実なんだと思ひ知らされる。

彼女…いるんだよね。

聞いてもいいのかな…？

「ねえ、高坂くん」

「ん？」

「……トキつて人、誰なの？」

ああ、もう。

自分の性格が凄く嫌になる。

なんで私はいつもこうなの？無難な行動ばかり。

「時季…？」

ほんの一瞬、沈黙したのが分かった。

高坂くんは話しやすいように横向に座っていて、視線を教室に巡らせる。

「…宮本時季^{みやもととき}っていつて、中学の時のダチ。バスケット部で一緒に、孝介先輩も同じバスケット部だったんだ」

「バスケット部？意外だね」

高坂くんは確か帰宅部だ。

運動っていうより、頭が良いイメージの方がある。

「俺は他に入りたい部活も無かったから入っただけ」
「いたずらっ子のような笑顔。」

それでもバスケットは好きなんだあって、なんとなく伝わってくるよ。
「だけど、時季は違う。あいつはバスケットで食ってけるようになるのが夢だったから。最初それ聞いた時はただのバスケットバカかと思ったけど…それだけじゃなかった。ちゃんと実力も伴っててさ」

その口振りから分かったのは2人がすごく仲が良いんだってこと。

それから、高坂くんはこんな表情もするんだってこと。

でも、ほんの少しだけ…寂しそうに見えるのは何でだろう？

「あいつのバスケットはすごいよ。高校もスポーツ推薦もらってさ。ボール奪ってシュート打つだけで高校に進学した。地方だけどバスケットの名門校にね」

「そんなにすごい人なんだ…」

「夏…！おはよ！」

突然の声。

驚いて視線を向けると佐原さんが教室に勢いよく入ってきたところだった。

「おはよ」

佐原さんが目の前に来ると高坂くんが口を開く。…佐原さん、ドア開けっ放しだよ。

そんな風に心の中で呟いたあと、そんな自分にまた少し嫌になる。ふと見上げると高坂くんの前に立っている佐原さんと目が合った。

…睨まれてる…？

「佐原」

「ん？何い？」

高坂くんは名前を呼ばれると途端に表情が変わった。
分かりやすいなあ。

高坂くんは人差し指でドアを指差して言う。

「お前ドア開けっ放し。閉めて来いって」

「あ！ごめーん。早く夏に会いたくってさ」

佐原さんは慌ててそれを閉めに行く。

高坂くんも同じこと思ってたんだって思うと、少し気分が明るくなった。

佐原さんがドアを閉めて戻ってきた時にまたドアが開く。

見るとあゆみが眠そうな顔で入ってきたところ。

ほとんど佐原さんが一方的にだけど、話してるこの2人の間に入る気は起きない。

私は席を立つてあゆみに話し掛けに行った。

聞けば、あゆみは私が帰った後勝手に孝介さんのゲームを初期化して徹夜で攻略しようと頑張ってしまったらしい。

『ダメだ。ちよつと寝てくる』

そう言つて1限目が終わった直後に保健室へ行ってしまった。

孝介さんの涙が目に浮かぶ。

「寝起きのあゆみにジュースでも買つていつてあげるか」

結局あゆみは戻ってこないまま1日の授業は終わってしまった。

鞆は教室に置いたまま、100円玉とケータイだけ持って売店に向かう。

寝起きの悪いあゆみの機嫌をとるには、保健室へ起こしに行く前に彼女の大好きなレモンティーが必須だ。

売店は隣の棟にあるから、1階まで降りたら廊下と言うより“屋根

の下にある敷石の上”という呼び方が的確な通路を通らなきゃいけない。

棟と棟の間にあるその場所は風通しもずいぶんよかった。私が丁度その場所に差し掛かった時も例外なわけではない。

「あ……！」

慌ててスカートを抑えた拍子に、100円玉を落としてしまった。きれいに転がった100円玉は中庭の方へ向かう。

追いかけると、それを拾い上げてくれた男の人がいた。

「あの、すみません……それ私が落としちゃって」

「おつ、そつか。野郎だったら貰っちゃおうかと思ってた」

はい、とその人は私に手渡してくれる。

「ありがとうございます」

私はお礼を言いながらも怪訝な表情だったと思う。

その人は整った顔立ちに金髪、耳には沢山のピアス。そしてなぜか私服だったのだ。

「名前は？」

「え？」

女の子なら誰でもときめいてしまいそうな笑顔。

私にも少しは効き目があったものの、あゆみの言葉を思い出していた。

『鈴子、あんたは素直だけど無防備すぎるの。妙な男に簡単に名前だのアドレスだの教えちゃダメだからね！』

私の中で、今日の前にいるこの人は確実に“妙な男”に値する。

「……なんで教えなきゃならないんですか」

「いやあ、出会った記念に」

……なんなのこの人！？

私がそう思った瞬間にポケットに入っているケータイが振動した。取り出してみるとそれはあゆみからの着信。

「もしもし、あゆみ？」

私は目の前の金髪男を放置したまま電話に出る。

「あ、うん。今レモンティー買ってから起こしに行こうかと思ってたの。え？…はいはい、買って行きますよー。ん、じゃね」

あゆみは私がレモンティーを買って迎えに行くまでもう一眠りするらしい。

ため息をつきながら終話ボタンを押すと、まだそこにいる金髪男。

「なんですか？」

「名前教えてくれないんなら、桃ちゃんって呼ばうつと」

唐突に満面の笑みで言う。

「何それ？」

「だって桃ちゃん、今日のパンツはピ…」

「鈴子です！！だいたい何でそんなことっ…！！」

相手の言いたいことが分かって、声を張り上げた。

自分で顔が真っ赤になってるのが分かる。

それを見ながら金髪男は面白そうに笑っていた。

「だってほら、さっきお金落とした時に風がさ」

「見てたの！？」

「ブブブー。残念。見えちゃったの。俺ってラッキー？」

この人って…！

私は何も言う気がなくなり、もう無視してとっとと売店に向かうことにした。

「待った、悪かったって」

その場を立ち去ろうとして歩き始めると腕を掴まれる。

「悪いと思うなら放して」

「そんな、冷たいじゃん。お詫びにレモンティー奢るよ。鈴子ちゃん、それからあゆちゃんの分もね」

なんであゆみのことまで知ってるのかとびっくりして思わず振り返る。

でもよく考えたらさっきの電話の会話を聞かれてたんだっけ。

思い出しても時既に遅し。

私は結局この人と売店に向かうしかなかった。

第四話

ガコンツ。

こういう場合はどうしたらいいのか、しっかりあゆみに聞いておけばよかった。

「はいよ。レモンティー2つね」

「ありがと…」

私は紙パックのレモンティーを2つ受け取る。

そして今更ながらそんな後悔をしていた。

…まあ、でも。

これで私がさっさとあゆみの所に行っちゃえばいいんだよね。そんな結論に達して、私は心の中で気合いを入れる。

「それじゃ、私はもう行くから」

「ちよーっと待った」

金髪男は自動販売機に手をついて私の行く手を遮ってきた。危うくその腕にぶつかりそうになって、驚いて顔を上げる。

「何!？」

「レモンティー買ってあげたじゃん。俺図書室探してんの。案内よろしく!」

相手がこの人じゃなかったら、きつとこの爽やかな笑顔に対してこんなにイライラすることもないのだろう。

「お詫びって言ったのそっちでしょ」

「うん、だからそれはあゆちゃんの分」

金髪男は1つのレモンティーを指差す。そしてその方向をもう一方に向けてとニツと笑った。

「鈴子ちゃんの分は…ね、これから案内してくればいいから」
確信犯だ…。

今日は後悔先にたたずっていうことわざを身を持って思い知る日ら

しい。

私は本日何度目かの、そして最大級のため息をついた。

そもそもどうしてこの人はここにいるんだろう？

学校に来て、それで図書室に用があるなんて。

「それで、そっちの名前は？」

「俺？白馬野王子様っていうの」

相手の粘りに負けて、結局私は金髪男を連れて図書室へ向かっていった。

私が尋ねるとしやあしやあとそんな笑えない軽口で返してくる相手に一瞬黙る。

「…へえ…」

「鈴子チャンひでえ…突っ込もうよ！」

そんなやり取りをしながらも図書室の前に着いた。

「はい、ここが図書室…」

「へえ。結構デカいじゃん。鈴子チャンもゆっくりしてけっ」

「え？あ、ちよつと！」

無理やり私の腕を掴んできて、そのまま中に引きずり込まれる。

図書室だということもあり、私は小声で文句を言っけどまったく聞こえていないみたい。

「何してんだよ、お前は…」

聞き覚えのある声。

天の助けだと思って見ると、それは机に向かっていた高坂くんだった。

しかもその声はこの金髪強引男に向けられている。

「夏〴〵。やっと見つけた！この学校まじ広すぎ。何？お前勉強なんかしてたの？似合わねー」

幸いにも図書室を利用してる人は少なかったから助かった。

高坂くんに話しかける金髪強引男はガタンと音をたてて彼の向かい側に座る。いつのまにか掴まれていた私の腕は解放されていた。

「んじゃ、鈴子ちゃん色々ありがとな」

「はあ…」

「ほら！あゆちゃんのところ行かなくていいのか？怒っちゃうゾ」
何？この人は高坂くんに会いに来たってこと？

多少混乱したものの、勝手に決めつけるような言葉に私は反論した。
「あゆみに会ったことも無いのに勝手なこと言わないで！…それじゃ、高坂くん、バイバイ」

私はそれだけ言い切って図書室を出る。

そして慌てて保健室へ向かった。

金髪強引男にはああ言っただけど…実際、あゆみは怒ってるに違いなかった。

バタバタと廊下に足音を響かせながら、同じ1階にある保健室へ全力疾走。

「あゆみ、ホントごめん！」

「遅ーい！」

私がドアを開いた直後に謝ったのとあゆみの明らかに機嫌の悪い声が飛んできたのはほぼ同時だった。

「どうして遅くなったのか、30字以内で簡潔に述べて」

ベッドに足を組んで座るあゆみは正に女王様。

私はどうやったたら今までの経緯を分かってもらえるか、縮こまりながらも考えてみた。

「…いや、30字じゃ無理…」

結局出た結論がこれ。

あゆみは瞬きをしてプツと吹き出した。

「鈴子のコトだから先生の手伝いでも付き合わされたのかと思った

んだけど」

「それならどんなによかったか…」

私はがつくりと肩を落とす。

興味津々なあゆみの隣に腰掛けると、私が持ってる2つのレモンティーにあゆみが気付いた。

「なんで2つも？鈴子いつもミルクティーじゃん」

「それがさあ…」

私はさっきあった出来事を詳しくあゆみに話した。

って言うか、ほとんど金髪強引男への愚痴だったんだけどね。

妙なあだ名の由来とか。

レモンティーではめられた、とか。

白馬野王子とか言う強引な男だったこととか。

何故かその人が高坂くんに会いに来ていたとか。

そういうことを一気に話し終わると、ふと視線を横で黙って聞いていたあゆみに向けた。

「そう言えばあゆみ、高坂くんと知り合いだなんて知らなかったよ… あゆみ？あーゆみちゃん？」

珍しくあゆみはレモンティーに手をつけないでいた。

目の前で手を振ってみる。

「鈴子、そのバカ男は図書室にいるんだよね？」

「うん… たぶん、だけど」

あゆみは無言で立ち上がって私の手からレモンティーを取り上げる。そして何も言わずに保健室を出ていってしまった。

「あゆみ！？」

びっくりした。

だってあんなあゆみは見たこと無い。

それに…一瞬だけだけど、目が少し潤んでいるように見えた気がする。

たぶん図書室に向かったんだ。

その理由は分からないけど、気づいたら私もあゆみを追いかけて保

健室を飛び出していた。

あゆみは何も言わないまま図書室に入る。

なんだか心配になってしまっただけ追いかけてきたものの…話しかけられるような雰囲気じゃない。

黙って後に着いて行くけど気まずいことこの上ない。

そんな風に考えていると突然あゆみは1つの机の上にレモンティーを2つとも置いた。

さっきまで私がいた場所に立つあゆみ。そこにはさっきと同じように、まだ高坂ちゃんと金髪強引男が向かい合って座っていた。

2人は目の前に急に現れたレモンティーで初めて私たちに気付いた様子だ。

高坂くんは大して表情を変えない。

対照的に、金髪強引男はあゆみを見上げながら綺麗な笑顔を浮かべていた。

「あれ、あゆちゃん。久しぶりだねえ」

「…ふざけないでよ。これ返すから。それから鈴子にももう関わらないで」

ただでさえ居ずらかった空気が凍り付いたような気がする。

高坂くんが小さくため息をついたのが分かった。

視線を向けると黙々と勉強を再開してる。

「あゆってば相変わらずだなあ。ほら、鈴子ちゃん混乱してるゾ？」

私を指差してケラケラ笑い始める。

あゆみは私を振り返りもしなかった。

その代わり…

パンッ！

静かな図書室に響いた乾いた音。

金髪強引男の笑い声は止んで、あゆみを真っ直ぐ見上げていた。

あゆみの瞳はやっぱり潤んで、じわりと広がっているはずの手の痛みを確かめるように右手を握りしめる。

静かに顔を上げた高坂くんと私の視線がその2人を見つめていて…私はまるで、時間がそこで止まったかのような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5984a/>

純恋淡雪

2010年11月27日06時01分発行